

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	東長 靖
論文題目	イスラームにおける神秘主義哲学と聖者信仰－スーフィズムの包括的理解の試み－		
(論文内容の要旨)			
本論文の内容は以下の通りである。第1部「スーフィズムへの視座」では、第1章において、包括的なスーフィズム理解のために必要な視座と方法論に関する課題設定をおこない、学説史を詳細に検討するとともに、第2章で「三極構造論」という方法論的な提案をおこなっている。その上で、第3章では、スーフィズムの歴史的な展開が概観されている。イスラーム史を12世紀までの古典期スンナ派の時代、12世紀から17世紀までの中期スンナ派の時代、それ以降を近現代と3期に区分した上で、それに相応するスーフィズムの成立期、スーフィズムがイスラームの核であった中期、近現代におけるスーフィズムおよびタリーカ（神秘主義教団）の変革から今日の現状までが俯瞰されている。 第2部「神秘主義としてのスーフィズム－存在一性論学派を中心に」では、存在一性論の名でも知られているイブン・アラビー学派を中心に据えて、第4章において、この学派の特質を学説史的な検討を踏まえて明らかにし、第5・6章では、カーシャニーおよびジーリーという同学派の傑出した思想家を素材に、この学派における「神－世界」概念、「完全人間」概念を説明し、第7章では、これらを手がかりに、思想の地域的な展開を中東、南アジア、東アジアなどとの比較の視点から論究している。 以上が、知的エリートのスーフィズムであるとすれば、第3部「民間信仰としてのスーフィズム－聖者信仰をめぐって」では、民衆レベルでのスーフィズムが論じられている。この面については、従来人類学からの事例研究が蓄積されているが、それを踏まえて、思想史のアプローチと人類学的アプローチの接合を試みている。第8章では、広域にわたるイスラーム世界を視野に入れながら、聖者論を検証した上で「聖者」の類型化の指標を示し、第9章では、思想史からみた聖者と宗教・社会的な実態としての聖者信仰をいかに統合的に把握しうるかについて考察をおこなっている。 第4部「イスラームのなかのスーフィズム－スーフィズムの位置づけをめぐって」では、前近代と近代においておこなわれてきた「正統イスラーム」からのスーフィズム批判が綿密に検討・考察される。第10・11章では、前近代のイブン・タイミーヤ、ビカーイー、スューティーをとりあげ、第12章では、18世紀以降現在まで大きな影響力を持っているワッハーブ派をとりあげ、スーフィズムとスーフィズム批判が相補的・互換的な思想構造を持っていることを明確にしている。第13章においては、第2部で検討された存在一性論学派、第3部で検討された民間信仰の問題と、第4部で検討されたイスラームとスーフィズムの関係を、対立概念として区分けすることのできないものとして、『多神教』的イスラーム」という概念を用いて考察している。スー			

フィズム研究がいかに地域研究の中に統合されうるかが論じられ、イスラーム世界の地域研究をおこなう際には、脈々と現代に生きているスーフィズムを認知して研究の視座に取り込む必要性があることが、多岐にわたって論究されている。

結論では、これらを総合し、スーフィズムがイスラーム社会と一体的に理解されるべきものであること、知的エリートから民衆までを包括するようなスーフィズム理解によって、スーフィズム研究が地域研究の重要な柱となりうることが指摘されている。

(論文審査の結果の要旨)

スーフィズム(イスラーム神秘主義)はイスラーム研究、イスラーム世界研究の中でも非常に重要な位置を占めているが、従来は哲学や狭義の思想研究の分野と考えられてきた。本論文は、狭義の思想にとどまらず、イスラーム社会で広く観察される聖者信仰、タリーカ(神秘主義教団)まで考察対象を広げて、スーフィズムの包括的な把握を可能ならしめるような総合的な視座を提示し、知的エリートの哲学的思索のレベルから民衆の聖者信仰に至るスーフィズムの諸実相を、連続性のあるものとして、理論と実証の双方から考察をおこなった労作である。また、歴史(前近代)と近現代を架橋し、古典的な文献研究と現代的な臨地研究を統合している点も、特筆に値する。

本論文は、第1部第1章において、包括的なスーフィズム理解のための視座と方法論をめぐって明確な課題設定をおこない、学説史を詳述したあと、第2章で「三極構造論」という斬新な提案をおこない、第3章のスーフィズムの歴史的構成においても多くの創見を示している。

第2部では、これまで申請者が大きな研究成果をあげてきたイブン・アラビー学派を中心に据えて、国際的にも最先端の同学派研究を展開している。第4章での同学派の特徴付けは従来の学説史から大きく一步踏み出すものである。第5・6章に示された「神一世界」概念、「完全人間」概念の分析は文献学的に緻密であり、立論も非常に卓越している。第7章で、以上の同学派の特質を前提に、思想の地域的な展開を中東、南アジア、東アジアなどとの比較の視点から論究している点は高く評価できる。

第3部は、民衆レベルでのスーフィズムについて、これまでの人類学的な事例研究を踏まえながら、思想史と人類学の成果の接合を試みている。マクロな視点からの枠組みの提案が、このように思想史サイドからなされていることは大きな貢献であろう。第8章で、これまで定義付けがやや錯綜していたイスラーム世界における「聖者」について、類型化のための明確な指標を示している点、第9章で、思想的な聖者論と宗教・社会的な実態としての聖者信仰をむすびつけて論じている点は、きわめて独創的であると同時に、地域研究への積極的な提言として価値あるものである。

第4部は、地域研究におけるスーフィズム研究の役割を論じている。イスラーム世界を対象とする地域研究において、現代社会でも広範に観察されるスーフィズムを研究の視座に取り込むことが有用かつ必要と論じているのは、きわめて説得的である。第10～12章で、スーフィズムの分析に反スーフィズムを取り上げているのは卓越した発想である。前近代・近現代におけるイスラーム正統派によるスーフィズム批判とされているものが、実は単純なスーフィズム批判ではなく、両者が相補的・互換的な思想構造を持っていることを明らかにした点は新しい知見として高く評価できる。第13章で、イスラームとスーフィズムの関係を分断する見方を乗り越えるために、『多神教』的イスラーム」という独自の表現を導入しているのもきわめて興味深い。ただし、この表現が与える誤解や混乱も予測されるため、さらに考察を深めることが望まれる。

総じて、本論文は、従来のイスラーム世界研究、中東地域研究におけるイスラームの宗教的理解が知的エリートと民衆の分離を自明視してきたことを批判して、スーフィズム研究を軸として思想と社会を統合的にとらえる視座を提示している点が、意欲的かつ優れた貢献をなしている。従来の「公的イスラーム」と「民衆イスラーム」の分化を打破して、スーフィズム研究を地域研究の一体的な一部とすることは、スーフィズム研究にも地域研究にも新しい地平を拓くものであろう。さらに、狭い意味での中東ないしはイスラーム世界の研究にとどまらず、南アジアなどをも考察の中に取り入れ、広域的な視野から地域間比較を展開していることも高く評価される。アラビア語、トルコ語、ペルシア語を駆使して、臨地研究と文献調査を結合している点も、きわめて優れた点であろう。この文献研究と臨地研究の統合の必要性は、イスラームのみならず、仏教やキリスト教にも妥当するものである。実際には統合的研究が実現しにくい現状を考えると、本論文が宗教学や人類学における他宗教の研究に及ぼす学問的刺激も多大であり、この点も高く評価される。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 22 年 7 月 29 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。